

日本語の表記形態が語の指示対象のイメージに与える影響： 飲食物による検討

How do Japanese Script Types Affect the Imagery of Referents?

波多野文[†], 天ヶ瀬正博[‡]
Aya Hatano, Masahiro Amagase

[†]奈良女子大学大学院人間文化研究科, [‡]奈良女子大学文学部
[†]Graduate School of Humanities and Sciences, Nara Women's Univ. [‡]Nara Women's Univ.
eaa.hatano@cc.nara-wu.ac.jp

Abstract

This article aims to examine how Japanese script types (Hiragana, Katakana, and Kanji) affect the imagery of referents. In the experiment, half of the undergraduate participants read a word written by one of the script types, imaged a concrete example that the word referred to, and rated the imaged example with Semantic Differential technique. The rest merely read a word and immediately rated the image of it with the same technique. Both the groups performed the task in all combinations of 15 words by 3 script types. The result shows that in “activity” dimension, imaging a concrete example increases the factor score of Hiragana and decreases that of Kanji.

Keywords — Script type, Emotional information

1. 問題

“ラーメン” “らーめん” “拉麵” という表記に対して、それぞれ具体的にどのようなラーメンをイメージするだろうか。後ろ 2 表記は外来語の表記規則に合わないが、商品名などの表記ではしばしば目にする。食品名から商品を選択する場合、読み手は表記形態の視覚的特徴による雰囲気やニュアンスに頼るだけでなく、食品を具体的にイメージするだろう。語の指示対象の具体的なイメージに表記はどのように影響を及ぼすのだろうか。

杉島・賀集 (1992) は大学生に各表記形態で記された単語を様々な形容詞について評定させ (SD 法)、同じ語でも表記によって情緒的意味が異なることを示した[1]。また、岩原・八田 (2004) は、文章表現において漢字、ひらがな、カタカナがそれぞれ “厳粛” “軽い” “モダン” というニュアンスを出すために用いられることを示した[2]。他方、成田・榊原 (2004) は、例えば外来語をひらがなで表記するような、表記規則からの逸脱それ自体

を言語表現の戦略として論じている[3]。

文字表記された語の指示対象を具体的にイメージする場合、表記形態の視覚的特徴によって生じる雰囲気やニュアンスだけでなく、表記についての規則や慣用も影響すると考えられる。それゆえ、杉島・賀集 (1992) が行った SD 法による評定も、各表記形態で記された単語を見るだけで評定する場合と、指示対象を具体的にイメージする場合とで異なるであろう。このことを実験で確認することが研究の目的である。

2. 方法

実験参加者 大学生 225 名 (実験群 103 名, 対照群 122 名) が実験に参加した。

材料 15 種類の飲食物を材料として用いた (表 1)。これは、飲食物が身近であるうえ多様な表記がされており、また、具体的なイメージが思い浮かべやすかったためである。評定には、従来の SD 法研究を踏まえて飲食物の評定に適した形容詞を選びその反対の意味の形容詞と対にして 19 組用意した (表 1)。1 つの飲食物について、各表記とそれに対する評定項目 (形容詞対) を 1 枚の評定用紙に記載し、15 の飲食物で冊子にした。

手続き 実験群は、表記ごとにそれが指示する飲食物を具体的にイメージし、それを自由回答欄に言語記述してから、評定対象に形容詞対のどちらがどの程度当てはまるかを評定した。対となる形容詞を両端に配した線分上の 7 目盛の 1 つに丸をすることで回答された。対照群では各表記による飲食物名を読むだけで即座に評定した。評定のペー

表1 対象語（カタカナ表記）と形容詞対

対象語	形容詞対
ゴハン	熱い — 冷たい
ラーメン	軽い — 重い
マツタケ	ありふれた — めずらしい
ギョウザ	危険な — 安全な
スシ	かたい — やわらかい
エビフライ	自然な — 人工的な
うどん	さわやかな — くどい
サクラ餅	高価な — 安価な
ミソ汁	すいている — つまった
シュウマイ	新しい — 古い
カンヅメ	おとなしい — 大胆な
カラアゲ	上品な — 下品な
ムギ茶	軽やかな — 重厚な
ミカン	静かな — さわがしい
コーヒー	からい — あまい
	弱い — 強い
	ゆっくり — すばやい
	うまい — まずい
	細い — 太い

3. 結果

評定項目（形容詞対）に対して因子分析（主因子法バリマックス回転）を実施した。抽出された「力量」「活動」「評価」の各因子について、飲食物ごとに各表記に対する因子得点を求めて尺度化した。因子得点に対する群×表記の混合2要因分散分析を各因子による次元ごとに行った。

その結果、群の主効果が、力量と活動の次元について有意であった（力量、 $F(1,223)=29.19, p<.01$ ；活動、 $F(1,223)=35.87, p<.01$ ）。表記の主効果（力量、 $F(2,446)=373.83, p<.01$ ；活動、 $F(2,446)=373.16, p<.01$ ；評価、 $F(2,446)=397.91, p<.01$ ）と群×表記の交互作用（力量、 $F(2,446)=4.09, p<.05$ ；活動、 $F(2,446)=156.33, p<.01$ ；評価、 $F(2,446)=3.89, p<.05$ ）が全次元で有意であった。

表2のとおり、力量と活動の得点は全般的に実験群で高かった。ただし、群の効果は力量ではカタカナだけでそれが明確であり、活動では漢字において実験群の得点が逆に低かった。表記の効果については、力量で漢字の得点が高くなり、ひらがなとカタカナの順位が群間で逆転した。活動では全般的にカタカナの得点が高いが、ひらがなと漢字の順位が群間で逆転した。評価の得点は、ひらがながもっとも高く、続いて漢字、カタカナであった。実験群においてひらがなと漢字の差が縮まり、漢字とカタカナの差が開いた。

表2 各因子得点の平均値

		表記タイプ		
		ひらがな	カタカナ	漢字
力量	実験群	3.76	3.81	4.89
	対照群	3.70	3.55	4.82
活動	実験群	4.27	4.69	3.16
	対照群	3.52	4.37	3.74
評価	実験群	4.87	3.72	4.51
	対照群	4.83	3.79	4.38

4. 考察

結果は、ある語の特定の文字表記それ自体とそれから思い浮かぶ指示対象の具体的なイメージとは情緒的意味が異なることを示唆している。まず、全般的には、指示対象の具体的なイメージでは文字表記での情緒的意味がより強まる可能性がある。

しかし、そう単純ではない。文字表記された語の指示対象を具体的にイメージすると、カタカナでは評価が若干下がる。活動性は漢字表記のときぐっと下がり、ひらがな表記のときぐっと上がる。

このことは文字表記された語の指示対象の具体的なイメージは、表記形態の視覚的特徴以外に表記習慣や表記規則の影響を受けていることを示唆している。そして、さらに、それらと語の指示対象それ自体の一般的特性との兼ね合いによって具体的なイメージが生成されると考えられる。

以上のことを飲食物以外でも確認し、文字表記から具体的なイメージを生成する場合の一般則を検討することが今後の課題である。

引用文献

- [1] 杉島一郎・賀集寛, (1992) “日本語における表記形態が単語の内包的意味に及ぼす影響”, 人文論究, Vol. 41, pp. 15-30.
- [2] 岩原昭彦・八田武志, (2004) “文字言語における感情的意味情報の伝達メカニズムについて”, 認知科学, Vol. 11, pp. 271-281.
- [3] 成田徹男・榊原浩之, (2004) “現代日本語の表記体系と表記戦略—カタカナの使い方の変化—”, 名古屋市立大学人間文化研究, Vol. 20, pp. 41-55